カトリック仙台教区報

2012年9月2日　No.207
発　行
カトリック仙台司教区
〒980-0014
仙台市青葉区本町 1-2-12
Tel(022)222-7371 Fax(022)222-7378
発行責任　広報委員会
URL http://sendai.catholic.jp/

「常に新しい創造へ」岩手県大会2012

さあ、また立ち上がろう！

仙台教区「常に新しい創造へ」をメーンテーマに、昨年7月3日に行われた「宮城県大会」を皮切りに、「福島県の集い」（昨年9月18日）、「青森県の集い」（6月10日）をへて、締めとなる「岩手県大会」が7月16日（月・海の日）盛岡白百合学園を会場に行われた。仙台教区開設75周年の記念と、東日本大震災を受けて、教区を挙げて被災者に寄り添い、「わたしたちは主において一つ」を確認しようという一連の県大会の最後とあって、仙台教区の各教会から信徒・修道者・司祭およそ800名が一堂に会した。

大会は、開会式の中で平賀徹夫司教のメッセージ、続いて映像と祈り、「東日本大震災―わたしたち仙台教区の記録とこれから」が放映された。

次に、各県代表が、「震災、苦悩、そして確かな信仰へ」をテーマに各自の思いを発表した。午後は、「信仰年を迎える」と題し、東京大司教区長・岡田武夫大司教の講話。平賀徹夫司教主司式の共同司式でミサがささげられ、大会実行委員長・飯塚豊氏（志家教会）が大会宣言を行った。一年間をかけて教区内を回った「絆のローソク」が、岩手県連絡協議会長・菅野耕毅氏（四ツ家教会）から平賀司教に返納された。

「岩手県大会」へのメッセージ
仙台司教区 司教 平賀徹夫

「主において　わたしたちは一つ！」。この4県に住む私たちは、キリストとつながってひとつの体として集めていただいた、仙台教区という一つの教会です。

「仙台教区」という名前は、1936年、カナダ人のドミニコ会士、ルミュー司教様が、司教座を函館市の教会から仙台市の元寺小路教会に移したときに、それまでの「函館教区」という名前から変更された名前です。

仙台教区の前身の「函館教区」が1891年に設立され、その時の司教はベルリオーズ司教、パリ外国宣教会の方でフランス人でした。昨年2011年は、その函館教区設立から120年、仙台教区と名前が変わってから75年という節目の年に当たるとして、教区大会開催が考えられました。それは、各県ごとの集いないし大会開催と教区内全小教区、修道院、事業所などをくまなく回ってすべてをつなぎ合わせるロウソクリレー、それに多くの教会を訪問しあい、互いの絆を深めあうスタンプラリーも企画されました。

私たち仙台教区という教会の信仰の恵みは、神のみ摂理・お計らいのもとに、最初はフランス人宣教師によってもたらされ、次にカナダのドミニコ会士方に引き継がれて広められました。また、欧米（フランス、ベルギー、カナダ）から女子修道会の修道女方も派遣されてきて、その恵みをさらに広め、成長させていただきました。

しかし、太平洋戦争という大変な受難の時期があり、息の根を止められるぐらいに成長がひどく阻まれた時期があったことも忘れてはなりません。

戦後、息を吹き返した教会は、ドミニコ会、ケベック外国宣教会、ベトレヘム外国宣教会、グアダルペ宣教会などの宣教師方の働きを頂き、信徒数も飛躍的に増えたのでした。しかしそれも1980年代前半くらいまでで、その後の仙台教区の勢いは横ばい、1990

生命の泉

▼私たちの「告解」は、した事を告白するが、しなかった事を悔やむことの方がずっと多いのではないだろうか▼昨年10月、大津市で中学2年の生徒がいじめを苦に自殺した。この事件が大きな話題を呼んでいる。そして8月16日には大津市の教育長が襲われけがを負った。教育長は当初いじめと自殺の因果関係ははっきりしないと言い、8月10日になってから「委員長として十分に取り組めず、大きな責任を感じる」と謝罪した。はじめ逃げの姿勢で言い訳し、厳しい追及があってから、謝罪したという対応の拙さもあった。教育委員会が機能していないというのは簡単だがそれで済むか▼未成熟の子ども相手の教育に教育長が出て行って解決できる事ではない。真相を究明して公表すると言うが、校長を更迭し、当該教師は退職くらいで、話題は新しい事件に移って忘れられる▼私たちは身近なところでの処理こそ大切なのに上に訴えて騒ぎを大きくして解決しようとする。当事者同士の中でしか本当の解決はない▼いじめる側には遊び程度の自覚しかないという。周囲の子にはやりすぎだという判断があって然るべきだし、指導者には子どもは常に指導が必要だという眼が光っていなければならない。しなかった責任は重い▼身近な人が死ぬとか、親しかった人が自殺したという時、もっと話を聞いてあげられなかったか、してあげられることもあったのではないか、と悔やむ。日常的に私たちの行動は落ち度が多い▼第二次世界大戦は避けられた、という話は歴史の審判か。人間らしくあるために日常的な努力は欠かせない。（守）

年代からは下降線をたどるようになっています。21世紀になってもこの傾向は止まりません。司祭、修道者数の減少、信徒総数の減少、洗礼数の減少、などが続いています。そしてそんな中での、昨年の3月11日の大震災でした。

復興の見通しがなかなか立たない現実が今も続いています。

しかし私たちはこれを、私たちに示されている「時のしるし」と受け止める必要があります。改めて息を吹き返すために私たちに「回心」を呼びかけている「しるし」です。

今日、私たちは、仙台教区年を締めくくる岩手県大会に集まりました。共に信仰を新たにする絶好の機会です。今日、大きな声で信仰を宣言しましょう。聖体拝領前に声を合わせて宣言する信仰告白です。「主よ、あなたは神の子キリスト、永遠のいのちの糧、あなたをおいてだれのところに行きましょう」。この主への宣言を、皆で、心の底から唱えることです。そしてまた、聖体拝領で「キリストの体」と示されたとき、喜びと確信・感謝を持って、大きな声で「アーメン」と答えることです。そのように宣言することの実は、「あなたは幸いだ」という主からの祝福と共に、具体的な生き方の中にもっともっと表れてくるはずです。

昨年3月の東日本大震災で、仙台教区は被災地・被災者支援のために、「仙台教区サポートセンター」を立ち上げ、「4→6、45計画」を進めてきました。

教区内の大勢の皆様の献身的なご協力のおかげで、被災された方々への支援の輪も広がり、同時に沿岸部と内陸部の教会の交流も深まってきています。

この支援の業はこれからも続けられますが、その中にもこの信仰宣言の実りが現れるでしょう。

もちろん、この支援活動は、教区外そして全世界から非常に大きな支援をいただいて、進められてきたものでもあります。そのことを思い出すたびに「感謝」の思いが自然と浮かんできます。

仙台教区4県の皆様、この教区年の催しの準備から実行に当たって、表に立ってあるいは裏方に回って、携わってくださった皆様に、厚く御礼を申し上げます。ありがとうございました。また、ご苦労様でした。そして、この岩手県大会には、「さあ、また立ち上がろう」というテーマも加わりました。「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」との、主のお約束の言葉に信頼して、みなさん、「さあ、また立ち上がりましょう」。

絆のローソク返納

《4県大会を終えて》

今まで自分の地域の「県の集い」にしか参加したことがなかったが、仙台教区年のため、他県の集いにも参加する機会に恵まれた。4県大会を終えて思うことは、75周年の節目を東日本大震災という大きな試練の真っ只中で迎えることになったという事実だ。

そこから私達は何を思うか？

当たり前のことが、当たり前でなくなった困難の中でこそ真の愛が見える。

仙台教区の津々浦々を回ってきたろうそくリレーの炎を見ながら、小さなひとりひとりを大切にしていくことが、希望の炎を灯し続けることにつながるのだと思った。（いわき教会　菅野昌明）

「信仰年」にあたって

司教　平賀徹夫

皆様ご存じのように、全世界のカトリック教会は今年の10月11日から来年11月24日までの期間を「信仰年」として祝います。10月11日という日はちょうど50年前、第二バチカン公会議が開幕したその日であり、また、『カトリック教会のカテキズム』の発布20周年となる記念の日です。それで、この「信仰年」では、第二バチカン公会議で発表された公文書が「たえず必要とされる教会の刷新のために力となる」ものであることを理解するために改めて読み直したい、また、信仰の力とすばらしさを知り、味わうために『カトリック教会のカテキズム』も学びなおしましょう、と勧められています。仙台教区ではこれに沿った「知的養成」のプログラムを計画しています。近いうちに発表されることになっています。

信仰の伝承という意味ではこの信仰年から始めるのにピッタリの、聖書の知識を小さい子（小学生それも中学年くらいまで？）に伝えていく楽しい（しかし根気のいる）方法が提案されました。親から子へ、あるいは祖父母から孫へ、その子本人に宛てた手紙を送るのです。小さい子は自分あての手紙を受け取ることなどほとんどないでしょうし、それも、自分が知らない差出人からの手紙ですから、興味津々で次回の手紙を待ってくれることでしょう。差出人は(今のところ)アブラハム、ヤコブ、ヤコブの子・ヨセフ（その１）、ルツの四人で、それぞれが神と共に歩んだ生涯を話して聞かせる形ですが、各50話ほどですから毎週1通ずつ出すとしても一人につき1年近くかかります。差出人になり代わって投函する父母あるいは祖父母にとってはわかりやすく楽しめる聖書物語として、この手紙を受け取る児童には信仰の知識を得られる面白い自宅での「副読本」としてうってつけかと思います。興味ある方は教区本部事務局のわたくしまで、ご連絡ください。

司教日程　9月・10月

9・8㊏ 部落差別人権委・シンポジウム
11㊋ 司祭評・役、司祭団・役
15㊏ 宣教司牧評・役員会
オタワ愛徳修道女会
16㊐ オタワ会 管区会議ミサ
17㊊ 部落差別人権委・定例会
18㊋ 〃 狭山事件現地学習会
20㊍ カト学法理事会
21㊎ 仙台白百合学園小
仙台教区サポート会議
22㊏ 宣教司牧評・定例会
23㊐ インターナショナルミサ
（元寺小路教会）
24～29㊏ 教区司祭団默想会
「宗教者９条の和」シンポジウム
10・4㊍ 社会司教委員会
5㊎ 特別臨時司教総会
7㊐ 新潟教区百周年
8㊊ 白河教会百周年
9㊋ 教区司祭団・役員会
11㊍ （信仰年開始日）
13㊏ 信仰養成講座
18㊍ カト学法理事会
20㊏ ＣＮＤ80周年
29㊊ 教区司祭団月例会

岩手県大会 2012　4県の発表

青森県

八戸塩町教会 掛端不似子

青森県は大震災の被害は小さかったが、大きな課題がある。六ヶ所の核燃料再処理工場、ウラン濃縮工場、低レベル放射性廃棄物埋設センター、高レベル放射性廃棄物貯蔵施設、MOX燃料加工工場、使用済み核燃料貯蔵施設、東通原発、建設中の大間原発など原発銀座といわれている。核燃料再処理工場等には4つの問題点があげられる。①福島第1原発と同様の電源喪失・冷却不能が起こり爆発して放射性物質が飛散した場合、北は函館から南は盛岡まで、人口の半分が犠牲になるだろうとの被害予測が出ている。②六ヶ所の再処理工場の真下には六ヶ所断層があり、地震のときの危険性がある。③再処理工場が稼働すれば、1日あたり原発1年分の放射性物質を大気中と海水中に放出するという。放射能の害は、生活を破壊し再び蘇らせることはできない。④青森県は、原発マネーの蟻地獄に陥ってしまい、太った物言わぬ奴隷という状態。わたしは、それが悔しい。

先月、福島県の原町教会を訪ねた。放射能ゆえに片づけができず放置されている家屋、津波で流され重なり合ったままの車、水没した田んぼ、草茫々の田畑、あまりのひどさに声も出なかった。原発や再処理工場による放射能災害は人災であり、福島と青森は繋がっていかなければならない。決して同じ過ちを繰り返してはならない。

原発の再稼動を開始したが、人のいのちと安全は、経済に優先する。この現実を見つめ「ノー」と言い続ける必要がある。子どもたちや若い世代とこれから生まれてくるいのちには安全な環境を引き渡す責任がある。3・11が時のしるしなら、神様はわたしたちに何を望み、それにわたしたちはどう答えるべきか。今日は、東京で「さようなら原発10万人集会」が開かれている。それらの方々と共に心を合わせて祈りたい。

岩手県

大船渡教会 山浦 玄嗣

大船渡教会は、今度の大地震による津波で、聖堂・司祭館と幼稚園は無事だったが、納骨堂とバスの車庫が全部流された。死亡した信者は5人、家屋の全壊・半壊は30戸に及び、今でも仮設住宅で生活している。大震災前の信徒数は、約100名で、他にフィリピン等から嫁いできた信徒がいたはずだが、その実数もわからなかった。しかし、3・11で被災した信徒たちを探して、塩田希（のぞみ）師が避難所を訪ね歩き、一人また一人と探し出した。その結果、思いのほか沢山いることが分かった。そして、彼女たちが子どもを連れて教会にくるようになった。

それまでは日曜日のミサに集まるのは20名程だったが、その後は50～60名にも膨れ上がり、聖堂は超満員で入りきれなくなった。信徒総数も、フィリピンからの方々とその子どもたちを入れると、以前の2倍の200名になった。

子どもの洗礼が7名、教会学校の子どもたちも20名になり、聖堂が狭くなったので、聖堂を増築した。

また、本年1月14日の、カリタスジャパン大船渡ベース「地ノ森いこいの家」の開所式には、平賀司教、菊地司教（新潟教区）、大塚司教（京都教区）、神父様方など19名の聖職者と大勢の信徒が参加し、盛大なミサとなった。この開所以来、延べ370名の助っ人が訪れた。

このように、信徒の半数がフィリピン人の母と子が占めるに至って、大船渡教会は大きく変わってきた。いわば現地人のわたしたちは、フィリピン人など外国からの人びと共に、新しい教会を作っていこうと、決意を新たにしている。

宮城県

一本杉教会 岩井 誠

東日本大震災の被災者に対して、仙台の各教会は、さまざまな支援活動を行ってきた。教会に備蓄していた非常食での炊き出し、コーヒーサービス、仮設住宅での味噌作り、復興支援バザー、七夕飾り、納涼夏祭、被災者のためのクリスマス会など。今後は、自立を支援する必要もある。

わたしたちの使命は、被災者に寄り添い、支え、神の愛を見える姿で具体的に届けることだと思っている。

福島県

野田町教会 佐々木 善英

宮沢賢治さんなら雨にも風にも負けないのでしょうが彼ですら日照りのときはおろおろ歩くしかなかった。わたしも同じ思いを抱いている。パウロの言葉に「弱いときこそ強い」とあるが、弱い困難なときほど真の力が湧いてくるのではないか、自らの弱さを謙虚に認め、そこから力が湧き出てくるのだろうと思う。

世界の人びとは日本に注目している。ただじっと耐えるだけではなく、次の一歩を踏み出そう。

大会宣言

昨年7月3日に開催された、カトリック仙台司教区［常に新しい創造へ］宮城県大会をスタートに福島、青森の各県大会を経て、本日岩手県大会において「主においてわたしたちはひとつ」であることを皆様と共に再確認できる恵みをいただき、感謝いたします。

キリストに呼ばれ、キリストに結ばれて新しく創造され、日々新しくされている私たちは、神から与えられたそれぞれのタレントを活かし、東日本大震災という未曾有の災害により今なお苦しい生活を強いられている人々の、社会の谷間におかれ、悩み、苦しんでいる人々の心に寄り添い、支え、励まし、祈りを捧げてまいります。

それが「いかに神に愛されているのか」を知っている私たちキリスト者に与えられた使命であり、その実践こそが私たちにできる「宣教」と考えます。

仙台司教区75周年をひとつの節目とし、また被災という苛酷な現実にもくじけず、「さあ、また立ち上がろう！」の大会スローガンのもと、「主においてわたしたちはひとつ」であることを心に刻み、キリストが抱いたと同じ思いを抱きながら、社会と共に歩み続けることを決意し、ここに宣言いたします。

2012年7月16日

大会実行委員長　飯塚　豊

絆のローソク・リレー

二戸教会　　12・2・26

「親切であれば」

それが一人の　人でもいい
人が親切であれば　どんな環境でも
生きられる。シュトルム神父語録より

北上教会　　12・2・12

今日は大雪でミサに預かる信者が少なかったのですが、いつも心を一つにして被災者の方々のためにお祈りしています。

一関教会　　12・1・29

「私たちは主においてひとつ」
新しい創造にまねかれて
共に歩みましょう。

遠野教会　　12・3・4

この大震災から、大自然の恐ろしさを感じた。その恐ろしさをくぐり抜けて絆が生まれました。絆は私たちを奮い立たせ、互いに助け合いました。
復興への道のりが確かなものとなることを祈りつつ、絆のローソクの光に心をとめ仙台教区の皆様との絆を大切にしていきたいと思います。

暁の星幼稚園　　12・2・13

全園児で絆のローソクを囲み、被災された方々へ祈りをささげました。
突然の出来事に、いまだ信じられない、信じたくない思いでいらっしゃる方がたくさんおられることでしょう。
私たちにできることは、祈ること、助け合うこと、そして、幼い子供たちに自然災害の恐ろしさと、人との関わりの大切さをきちんと伝えていくことでしょうか?
ひとりの保護者の方が「子どもの笑顔に救われました。この子がいてくれて本当に良かった」とおっしゃいました。子どもたちはみんなの宝です。大切な子どもたちと一日一日を大事に過ごしていきたいと思います。

一関藤保育園

12・1・31

きぼうの　ひかりが
ずっと　かがやき
なにごとにも　まけない
　ちからとなりますように

光の園幼稚園　12・3・8

～絆～
この１年を振り返ると、ご父母の方々のご協力と、毎日笑顔で幼稚園に通ってくる子どもたちに支えられ、頑張ることが出来ました。
たくさんの方々に支えられたことを忘れず、これからも前向きに進んでいきたいと思います。

花巻教会　　12・2・19

どのような試練にあっても、常に私たちと共にいてくださる神よ　大災害からの復興に立ち向かうすべての人々を祝福し力づけてください。特に極めて危険な状況のただ中で原発事故の処理に携わる大勢の人々をお守りください。災害にあわれた人々、特に原発事故によって不安な状態におかれている人々をお守りください。

水沢教会　　12・2・5

祝　仙台教区創立７５年
祈　東日本大震災の死者、
　　行方不明者の安息
祈　大震災、原発事故の
　　被災者のため

２０６号５頁千厩・清心幼の写真が間違っていました。正しくは左の写真です。

―お　し　ら　せ―

後藤寿庵水沢就任 400 年祭記念
奥州市民劇　公演
『後藤寿庵物語～木漏れ日のように』
奥州市文化会館
2012.10.14（日）14：00
15（月）10：00・14：00
一般 1,500 円　高校生以下 1,000 円
14 日 11:00～ミサ・昼食準備します
問合せ・・・水沢教会 0197-25-7707

藤ホーム　　12・4・18

手を合わせ、心を合わせていのりました。寄り添う思いをこのローソクに託します。
私たちと共に世界中の方々にも燃え続けますように・・・
この困難を乗り越える力が持続しますように・・・
この地に穏やかな日々が、早く戻りますように・・・
聖母マリア様のご加護を祈り続けます。

児童養護施設　藤聖母園
12・4・21

♡祈りの集いでささげた子ども川柳♡
・震災のかなしみのりこえガンバッテ
・ボランティア　たいへんなところも
ありがとう
・ローソクをかこんだお祈りとどいてね
（小学生）
・被災地の思いを胸に頑張ろう
・津波より大きな絆でうち勝とう
・復興する明るい未来を信じてる
（中学生）

本町教会　　12・4・22

私たちは目を背けない。
私たちは忘れない。
不安と苦しみの中にある人たちのことを。絆の灯がたくさんの人の祈りによって繋がれて来たことを。また、私たちの祈りを込めて繋がっていくことを。この絆の灯を通して教区の人たちの想いが一つになることを。

三沢教会・三沢幼稚園
12・4・1

毎週一つの小教区のために
お祈りをささげています。
一日も早く「新しい創造」への道が力強く開かれますように。

十和田教会　　12・4・8

御復活の主日に十和田教会でローソクリレーを行いました。
3・11の大震災では直接的な被害はありませんでしたが、教区共同体として記憶を風化させないよう情報を集め、少しずつでも支援を続けていきたいと思います。

大湊教会　　12・4・15

「強い絆で結ばれ、永遠に灯し続けよう信仰の明り」
主日のミサで他の小教区のため祈りをささげています。

野辺地教会・野辺地幼稚園
12・4・17

今日この復興への灯が人々の願いを結び、大きなよろこびの日へとつながりますようにお祈りいたします。

釜石教会　　12・3・11

3月11日、14時46分。町の防災無線から、あの日と同じけたたましいサイレンが鳴り響きました。それと同時に近隣の寺院の鐘、そしてカトリック釜石教会の美しい鐘が、天国に届けと言わんばかりに鳴り響きました。その鐘にかき消されるように、近隣の人々の叫び声が海へ向かって押し寄せていくのが、かすかに聞き取れました。その瞬間から、新たな日々が始まったのです。共に祈ってくださったボランティアさんたちの力強い支え。そして「絆のローソク」は、釜石の街を神秘的に照らしてくれました。

小百合幼稚園　　12・3・16

あの日、祖父母宅に降園した園児1名を失いました。まだ、あの日の記憶をたどれない日々ですが、季節はめぐって春が来ました。今日は子どもたちと一緒に生きていれば4月から年長組になるお友だちのためにもお祈りしました。たくさんの人たちの思いやりや、やさしさに助けられたこの1年、生きていること、生かされていることのお恵みに感謝します。

宮古教会　　12・3・18

支えあい、助けあい、分かちあい、励ましあい、愛しあい・・・。
「絆」を深め、希望を持って、いつも共にいてくださる神と歩んで行きたいです。

「福島やさい畑～復興プロジェクト～」

仙台教区「新しい創造」への取り組み

「福島やさい畑～復興プロジェクト～」は、放射能測定の結果、安全が確認された福島産農産物を買い取り、東京のカトリック教会で直売させて頂く活動をしています。今年になって協力してくださる教会は埼玉県、神奈川県にも広がってきました。福島やさい畑のスタッフは5名ですので、私たちが直売に伺えない所は委託販売や宅配便での注文を頂く形で、今や全国のカトリック教会の皆様のご協力を頂いています。

福島の問題は長期戦です。あれから1年半が経ちましたが、まだまだ復興にはほど遠い状態にあります。農家さんの生活は先が見えません。自活の道は厳しさを増しています。

椎茸農家さんは今まで頑張ってきましたが、そろそろ力尽きたのでしょうか、「やめるしかないかな」という言葉が出るようになってきました。以前のお客様は今も戻ってきません。おそらくもう戻らないでしょう。新たにお客様を開拓していくしかありません。

遠方の方々にもご協力を頂けるよう、7月から「福島やさい畑～WEBショップ」を立ち上げました。ネットが苦手な方はFAXでも電話でも注文を受け付けておりますので、ご利用ください。

さらに、CTVCの原町ベースが関わっている3つの仮設住宅（87戸、76戸、146戸）の方々へ野菜の支援も行っています。

土地が流されたり畑が使えないなどの理由で野菜が作れないということで、1戸あたり500円分の野菜を週に1回訪問して配布しています。そのための資金は1口500円で皆様にご寄附願っております。

（振込先＝口座記号番号＝02250-8-118743　口座名称＝福島やさい畑）

野菜を作りたくても作れない仮設の方々にとって、野菜を頂くということはお金を頂くよりも大きな意味があるようです。「また、野菜作りをしたい」という意欲が芽生えてご本人が元気になり、そして、それは復興への道の一歩になっていくことだからです。

皆様の応援がなければ復興できないのが現実です。ご支援宜しくお願いいたします。

（カトリック二本松教会信徒会長）

柳沼　千賀子

東京のカトリック教会での野菜販売

赴任司祭の自己紹介

京都教区司祭の洗礼者ヨハネ森田直樹と申します。

昨年10月から大船渡教会の主任代行としてご奉仕させていただいております。自ら手を挙げてやってきたわけではないのですが、不思議な出会いと司教様の任命に感謝しております。

空地が広がる中に、灯台のように丘の上に建っている教会に住み、電気を灯し続け、食べて飲んで寝ているだけの毎日ですが（もちろんお祈りもしております）、文字通り、大船渡の人たちと市民として共に住み、寄り添うことを目指しております。よろしくお願いいたします。

＝略歴＝

1993年4月　京都カテドラル河原町教会にて司祭叙階

2011年9月　仙台教区へ派遣（仙台教区サポートセンター付き）

同年10月～大船渡教会主任代行

「ゴミを考える」

私たちは毎日ゴミを捨てる。最近のデータによると、生活ゴミだけでも一人当たり毎日750ｇ捨てる。年間では274ｋｇとなり、4人家族なら1トントラック一杯分になる。

ゴミを捨てる生活はいつから始まったのだろうか。江戸時代の記録を見ると、徹底的な廃物利用をしており、ゴミはほとんどなかったようだ。工業生産が始まり、大量消費の時代となり急にゴミが増えた。生活ゴミ以外にも産業廃棄物と呼ばれる膨大なゴミもある。

生態系には不用なものがない。すべてが循環し、新しい創造につながる。人間だけがこの循環を破壊し、地上をゴミで満たしている。とりわけ、何千年、何万年も保存しなければならない核のゴミは、生態系の将来に大きな不安を与えている。

地球を大事にする会　猪岡　光

大船渡市の印刷所イー・ピックス（代表取締役 熊谷雅也）では、昨年大好評だった東日本大震災復興支援チャリティーカレンダー「北に祈る」２０１３年版を制作した。表紙は古川教会。撮影は北国の24の教会を収めた『古教会への誘いⅡ』の写真家伊藤龍也さんが担当している。価格は送料・消費税込みで1部二千円。このうち千円がカリタスジャパンと仙台教区の被災地支援活動のために寄付される。九月初めまでに小教区宛てに実物見本と注文カタログを郵送する予定。今年は、さいたま・横浜・福岡・新潟の4教区もあわせて作成。どれでも注文できる。熊谷さんは「たくさんの皆さまにご協力いただければ幸せです」と話している。

お問合せはイー・ピックスまで。（電話 0192-26-3334）

子どもたちの夏

盛岡地区サマーキャンプ

「私たちはみんな神様のこども　兄弟です」

盛岡地区合同の教会学校サマーキャンプが、今年も田沢湖キャンプ場で7月29日（日）～30日（月）、1泊2日で開催された。

参加者は、小学生6名、中学生3名、高校生1名、エテメ神父他リーダー7名の18名。

ミサ終了後、リーダーの車に分乗し、12時過ぎにキャンプ場に到着し、バンガローに荷物を置き、「たつこ像」までドライブ。

湖岸に群がるウグイの大群にエサをあげるとパチャパチャ跳ねる姿に子どもたちも大はしゃぎ。

キャンプ場に戻り、スイカ割りなどを楽しんだ後は、夕飯作り。メニューは定番のカレーとシチュー。それぞれの役割分担にチームワークもばっちり。

のびのびと遊んだ後の夕飯はことのほかおいしかったようで、いつもは嫌いな野菜もペロッと食べてしまった子も。

お腹いっぱいになった頃、きれいなオレンジ色の夕陽が樹々の間から見え、思わず湖の方へ歩き出した。感動を胸に、神父様から今年のテーマ「私たちはみんな神様のこども　兄弟です」についてのお話を聴き、夜のお楽しみは、花火とマシュマロ焼。湖畔での楽しい時を過ごした。

2日目は、田沢湖一周の遊覧船に乗り、デッキから波の様子やあたりの景色を楽しんだ。バンガローを掃除し、帰途についた。

教会では家族の方々が迎えてくれ、みんなで手をつなぎ丸くなって神父様の祝福を受け、解散となった。

（志家教会　一戸　真理子）

仙塩地区教会学校合同キャンプ

仙台教区75周年を記念して、今年のキャンプはホセ神父様の提案で初めて地区合同で行った。仙台市泉ヶ岳少年自然の家には、9教会から子供が42名、指導者が19名集まり、楽しい時間を共にした。

野外炊飯に始まり、ハイキング、キャンプファイヤーと自然の中で活動するうちに、ほとんど初対面だった子供たちが、仲良く協力し合えるようになった。小松神父様とホセ神父様にお風呂で背中や足を洗ってもらい大盛り上がりの男子、宿泊の部屋で遅くまでガールズトークに盛り上がった女子…きっと忘れられない思い出となったことだろう。

教会プログラムでは、仙台教区4県の小教区をグループに分かれて地図を作り、実際の教会の写真を見て、教区について勉強した。発表では、自分の小教区の名前が呼ばれるとどの子も嬉しそうで、たくさんの教会があることを知る中で、やはり所属教会への愛着を確認することにもなった。

最終日は、初聖体が済んでいる子どもたちを集めて「ゆるし」について学び、希望する子はゆるしの秘跡を受けた。司祭の常駐が難しくなって以来、子どもたちがゆるしの秘跡を受けにくくなっている実態を踏まえて、子どもの素直な疑問にも応え、その大切さを教えていただいた。

最後は野外ミサにあずかり、感謝と喜びのうちにキャンプを終えた。神父様、シスター方、リーダーも全力で子どもたちに関わっていく中で、たくさんの恵みを受けたように思う。何より「楽しかった～」という子供の笑顔で、教師会の仲間と共に今後も神様の愛を伝えていこうという気持ちになった3日間だった。（佐々木いづみ）

仙塩地区中高生会キャンプ

8月12日～13日、ドミニコの家にて、毎年恒例の仙塩地区中高生会キャンプが行われた。ここ数年、人数が集まらないのが悩みだったが、今年は10名の参加。うち、8名が初参加。

カテドラルで平和ミサにあずかった後、ドミニコの家へ、沢遊びにスイカ割り、最新のCGで作られた「十戒」のDVDを鑑賞し、夕食はバーベキュウ。夜の分かち合いをして一日目は就寝。二日目は午後、ホセ神父様によるラリー。グループに分かれ指令書が渡され、聖書の一節やヒントが書かれ、そこから次の指令書の場所を考えて探しに行く。十分に楽しめる内容に中高生たちも頭も体もめいっぱいに使って楽しんでいた。

今回のキャンプは、日頃教会に来ていない中高生たちがまだたくさんいること、そういう子どもたちもすぐに教会に馴染んでいけるということを実感した。この出会いをスタートとして、歩み続けていきたいと思う。

2012仙台ドミニコの森遊々ランド

野外で遊ぶことができない福島の子どもたちを自然の中で思い切り遊んでもらおうと、聖ドミニコ修道会と仙台白百合女子大学が主催したキャンプが8月8日～11日までドミニコの家で開催、桜の聖母学院小学校、郡山ザベリオ学園小学校の子どもら、26名が参加。

フィリピン出身の方々と共に合宿

大船渡教会では、7月14・15日、奥羽宇宙遊学館とマストロロマン大東で合宿を行い、子ども18人、スタッフ9人が参加した。参加者の中にはフィリピン出身のお母さん3名とその子どもたち7名も加わり、打ち解けあって楽しい時を過ごした。

（新沼　由美）

「アーメン」ではなく 然あれかし」

仙台教区75年の歩みを語る 仙台ロゴス研究所講演会

仙台ロゴス研究所主催で仙台教区設立75周年記念講演が行われた。テーマは「仙台教区75年の歩みを語る」。講師は元寺小路教会信徒の池田まりさんで、自らが秘蔵している旧い写真や資料をスクリーンに映し出しながら、教区設立から終戦までの歴史の中で「後世に伝えたいこと・残したいこと」を体験を交えて語られた。

戦争中には「アーメン」と言う言葉は敵国語として禁止され、代りに「然（しか）あれかし」と言わせられたり、ゴミサの中で君が代を歌わせられたりしたこと。明治・大正にかけて仙台にも小神学校が置かれて、ここから後の早坂兄弟司教や土井枢機卿が巣立っていったこと等、興味深い話に100人に近い参加者は聴き入ると同時に先人達の信仰の強烈さを肌で感じたようであった。

←1910年の土井神学生中段左

原発いらない市民デモ

首相官邸前に続けと、仙台でも、「脱原発金曜デモ」が7月27日から始まった。デモに参加した市民は、「原発いらない！」、「女川原発再稼働反対！」、「命を守ろう！子どもを守ろう！」などとシュプレヒコールをしながら、東一番町から青葉通りを通って仙台駅前まで歩いた。

参加者の中には、子ども連れの若いお母さんや、青森や、登米・丸森などから来た人もあり、毎回300名前後が参加。カトリック仙台正平協のメンバーも「だから、原発やめて」の横断幕を手に参加した。デモ終了後、有志20名程が元寺小路教会信徒ホールで情報交換した。当分金曜ごとに実施する。

子供の祈りの集い

6月23日（土）10時から、東仙台教会で仙台中央地区7教会と白石教会の教会学校（小中学生）とそのリーダーの約30名が集い「召命のための祈りの集い」が行われた。

教会の玄関前に張られたテントの中には、在仙の2つの宣教会と9つの修道会の紹介パネルが展示され、パンフレットや書籍、プレゼントを揃えて神父様や各会の修道者がアピールしようと子供たちを待ち受けていた。子どもたちがラリー用に手渡された「仙台市にある修道会・宣教会・教区司祭を知ろう」の用紙の空き欄に、データーを調べて埋めていくと全部で12のシールが張られるという趣向だ。各自用紙を手にテントを回り、盛んに質問しながら空欄を埋めていく=写真=。

「日本にキリスト教がきたのはいつ？」と問う小学生に「イゴヨロシク」とヒント。「えっ？」。愉快そうに神父様は「1549年だよ」。調査項目にはないが、普段見慣れない男子修道会のスターン姿に子供たちの質問が飛ぶ。全部シールを貼り終えて誇らしげな小学生にシスターからの声がけ。「ボク、神父さんになる？」「たぶん！」。8歳だという男の子の力強い返答に「オーッ」と感激の声。今、まさに、蒔かれている召命の種が根付こうとしている兆しが読み取れるようだ。

訃報

ヨゼフ石井恭一（88歳）
ラ・サール会 修道士

1924年 東京都生まれ
1948年 ラ・サール会入会
1956年 終生誓願
1971～93年 ラ・サールホーム（途中1年間ローマで研修）
1996～98年 函館ラ・サール学園理事長
1998～06年 社会福祉法人理事長
2006年 退職
2012年8月2日 帰天

鹿児島と函館のラ・サール中学、高校の教育事業にも参加したが、恵まれない児童への養育に関心が深く、人生の大半を仙台ラ・サール・ホームの児童養育事業に費やした。聖ラ・サールの霊性を研究し、著作も行った。

【告知板】＜青年男女の黙　想　会＞

[日　時]2012年11月25日㈰ 9時半～17時
（遠方からの参加者は前日から宿泊可）
[テーマ]　キリストに従って生きる（仮題）
[講　話]　ホセ神父（グアダルペ宣教会）
[場　所]　ドミニコの家（青葉区芋沢青野木257―1）
[申込先]聖ドミニコ会仙台修道院　Sr.柚木まで
Ｔｅｌ：　０２２－２２５－１０５５
E-mail：　ed.yunoki@hotmail.co.jp
[申込締切]　１１月１５日（木）
[参加費]　５００円　（宿泊　２０００円）

新刊案内

なぜ教会は社会問題にかかわるのかQ&A

編者　日本カトリック司教協議会社会司教委員会／発行　カトリック中央協議会／定価600円＋税

第2バチカン公会議によって教会は大きく変わった、と感じている人は多いようです。特に、社会問題について、教会が発言するたびに、また、署名運動のたびごとに、「教会が政治問題にかかわるのは間違っている」という声が聞かれます。そのような方々、また、実際に社会問題と取り組んでおられる方々から寄せられたたくさんの疑問、質問に答えるために、本書は編集されました。

まず、第1部は、なぜ教会が社会問題にかかわるのか、という本書のタイトルにもなっている問いに、教会の基本姿勢、救いとの関係、教会共同体の信徒、修道者、聖職者が担っている役割、相互の協力の必要性などについて答えています。

第2部は、「教えに照らした具体的行動の根拠」と題して、実際に教会がはっきりとした態度を示している問題―たとえば、憲法9条、米軍基地、滞日外国人が直面している入管法、死刑廃止、原発などについて、答えています。

本書のところどころに挿入されている「キーワード」も大変参考になるものです。